

2015年11月30日掲載

口腔ケアの必要性
細菌、病気の原因に

口腔（こうくう）内にはおよそ300～400種類の細菌が存在し、その数は約2000億個以上だそうです。暖かく高湿度、かつ栄養も多い口腔内は、菌がすみ着いて当然の環境といえます。これら口腔内の細菌は血液をめぐり、離れた臓器を攻撃して思わぬ病気を引き起こすことがあるので注意が必要です。

例えば、口蓋扁桃（こうがいへんとう）を含む口腔内の細菌が炎症を起こし、IgA腎症という腎臓の病気を引き起こすといわれています。また、口腔内の歯周病菌が感染性心内膜炎という心臓の内膜に炎症を起こす病気の原因になる場合があります。

さらに、手足の指の血管を詰まらせ指が壊死（えし）するバージャー病と関係したり、糖尿病を悪化させたりするなど、多くの病気の原因になったり、病気を増悪させたりします。

また、重度歯周病に罹患（りかん）している妊娠中の人は、歯周病のない人と比較して、低体重児出産や早産などの確率が7.5倍高いといわれています。その原因はまだはっきりとはしていませんが、歯周病菌が多い妊婦は、分娩（ぶんべん）期にいたる前に子宮収縮が引き起こされ、早産となるのではないかとされています。

疾病に罹患したり、妊娠したりしてから口腔内に目を向けるのではなく、平時から口腔内にすみ着いている多くの菌に対して注意を払い、細菌数の減少を図るためにセルフケア、プロフェッショナルケアを行うことが全身の健康の面からも大切といえます。